毎日が巡礼
～天の国を生きる～

次週の木曜日は祝日、次々週三十日は年末休刊となるというので、今回が今年最後の巡礼記である。

恥ずかしい話だが「かれいしゅう」と耳で聞いて、カレーのにおいと思っていた。「加齢臭」、私も七十歳を超えてその可能性がある年齢だ。間もなく新年、また一つ歳を重ねる。

加齢のせいだろうか、以前は巡礼を、旅に出てからのものと思っていたが、最近は日々の生活が巡礼だと思うようになった。神の国は死後だけのものではない。日々の生活の中で神に出会い、新たな発見がある。

今も神の国を生きているのであり、来年からはそのような視点で一カ月に一度「日々巡礼」と題して書こうと考えていた。

十一月三日に宇部カトリック教会で、東京教区の晴佐久昌英神父の講演会があった。神父は五十三歳と若いが、著書も何冊もあり、高円寺教会で六年間に五百人以上の人に洗礼を授けるなど人気の神父である。ちなみに我が下松教会ではこの一年、一人の受洗者もいない。

講演はご自身が神に仕える者だとの確信に満ちていた。「人は誰もが神につくられた者である、今の世の苦しみや悲しみにくよくよせず、神の愛に目覚め、幸いの者であることに確信を持て」と言われたように思う。

妻は講演のあと、晴佐久神父の「一カ月、目めくりカレンダー」を買い求めた。その中に「毎日が巡礼、ここが聖地」という言葉を見つけ、前記の「日々巡礼」より「毎日が巡礼」の方がいいのではと助言してくれた。

確かにこの方が私の気持ちにぴったりだ。上五島・長崎巡礼記は今回は休み、今年最後のタイトルは「毎日が巡礼」とし、来年の年賀状もこの言葉を使用することにした。

毎日が巡礼なのだ。

加齢は加齢臭に象徴されるようにマイナスイメージがある。それは老いて死んですべては終わりと考えるからではなかろうか。

キリスト教の死生観は違う。死はすべての終わりではなく、新たないのちへの出発である。だから死を「帰天」と表現する。

神との交わりの中に身を置き、神の息吹とともに日々の生活を送る…それが毎日が巡礼的生き方ではあるまいか。そこには目に見えない神との出会いがある。

先日、燃やせるごみ袋を出そうとしたら、袋にはまだ相当ごみが入ることに気づき、庭の草を取っていたらごみ回収車が来た。あわててごみ袋を持って回収場所に走った。

回収車の運転手は私に気づき、もう一人の作業員が私の方に走って来られ、笑顔で「私が持って行きましょう」と言われた。

我々は仕事や学歴などで人を差別しがちである。汚いごみ回収の仕事は大変だと思う。

最近は若い女性まで作業員の仕事をしている。

ごみ袋をわざわざ小走りで取りに来られ、笑顔で「私が持って行きましょう」と言われる姿に神を見た思いがする。自宅に帰りながら日頭をおさえた。

日々の生活の中で神の息吹を感じよう。一年間、有り難うございました。どうぞ心豊かなクリスマスと新年をお迎え下さい。

（元山口放送取締役ラジオ局長）

他者を待つ　我が家の玄関の馬小屋